

論文

# 日本語のアクセントと イントネーションの競合的關係

定延利之

## 要旨：

本稿は、現実のコミュニケーションを考慮に入れることによって、現代日本語（共通語）の話しことばに対する我々の理解を、特に語彙的なアクセントとフレーザルイントネーションの關係に関して深めようとするものである。

伝統的には、共通語における語彙的なアクセントとフレーザルなイントネーションは、基本的に非競合的と考えられてきた。だが、この考えでは、連なり型や重なり型は説明できるが、排他型は説明できない。排他型はこれまでほとんど取り上げられていなかったが、よく注目してみると、いくつかの方言と同様、これまで伝統的に考えられていたよりも、頻繁に幅広く観察できる。そこで本稿では、語彙アクセントとイントネーションの關係について、競合説を提案する。結論は以下4点である。

第1点：日本語（共通語）の語彙的なアクセントとフレーザルなイントネーションの關係をとらえるには、伝統的な非競合説よりも競合説の方が有効である。アクセントとイントネーションは潜在的には、ピッチへの反映をめぐって潜在的に競合している。つまり基本は排他型である。

第2点：非競合説よりも競合説の方がよいという本稿の主張は、以下2つの観察結果により支持される。観察1：これまで考えられていたよりもずっと頻繁に幅広く生じることが判明した排他型を説明できるのは競合説だけである。観察2：連なり型や重なり型の場合には話し手の強い気持ちがなく、このことを説明するには競合説に立ち、「強さのアイコンシティ」の考え（話し手の気持ちが強いほど、その気持ちに対応する韻律が強い力

を得て、排他型を生み出しやすくなるという考え）を取り入れる必要がある。

第3点：強さのアイコニシティは、少なくとも2点の根拠を持つ。それは、疑似的な最小対立を用いた知覚実験と、アクセントがイントネーションを抑え込む現象の存在である。

第4点：これまで非競合説が基本と考えられていたのはおそらく、実験室的環境では被験者はふつう強い気持ちを示さないせいだろう。

**キーワード：日本語、アクセント、イントネーション、競合説、強さのアイコニシティ**

### **Abstract :**

This paper aims to deepen our understanding of grammar of spoken Standard Japanese with special reference to the relationship between lexical accent and phrasal intonation by taking actual communication into consideration.

Traditionally, lexical accent and phrasal intonation in Standard Japanese have been thought as non-competitive. By this view, there are no competition for realization between lexical accent and phrasal intonation. Such a view of non-competition can explain copulative or cumulative forms, whereas it cannot explain conflictive form. Although research on Standard Japanese have been reluctant to admit conflictive forms, close investigation reveals that conflictive form is much more often and widespread than has traditionally been thought as well as in some of the other dialects. This paper suggests a new view which can explain all of these three pitch forms. Conclusions are as follow.

First, the relationship between lexical accent and phrasal intonation in Standard Japanese can be better understood by competitive view rather than by traditional non-competitive view. Lexical accent and intonation are potentially competing for generating their own pitch form (i.e. conflictive form).

Second, the superiority of competitive view over non-competitive view is supported by two observations: (i) It is only competitive view that can

explain conflictive form, which is much more often and widespread than has traditionally been thought; (ii) By adopting Iconicity of Strength (i.e. The stronger the speaker's attitude is, the more likely the corresponding prosody has strong power to generate a conflictive form), competitive view rightly expects lack of strong attitudes in copulative and cumulative forms.

Third, Iconicity of Strength can be justified at least in two ways: one is perceptual test, and the other is the possibility of upset victory of accent over intonation.

And fourth, non-conflictive forms have traditionally been thought as basic, probably because it is rare for informants to show their strong attitudes and prominent characters in the environment of laboratory.

**Keywords** : Japanese, accent, intonation, competitive view, iconicity of strength

## 1. はじめに

本稿は、現実のコミュニケーションを考慮に入れることによって、現代日本語（共通語）の話しことばに対する我々の理解を、特に語彙的なアクセントとフレーザルイントネーションの関係について深めようとするものである。語彙的なアクセントとフレーザルイントネーションは、伝統的には非競合的つまり平和共存的と考えられてきたが、この考えの問題点はこれまで考えられていた以上に大きい。そこで本稿では語彙的なアクセントとフレーザルイントネーションについて競合説を提案する。

以下、先行研究の概観を第2節で、その問題点の検討を第3節でおこなった上で、第4節で競合説を提案する。第5節では、競合説に対して予想される反論を取り上げ、それに対する再反論をおこなう。最後の第6節では結論をまとめる。

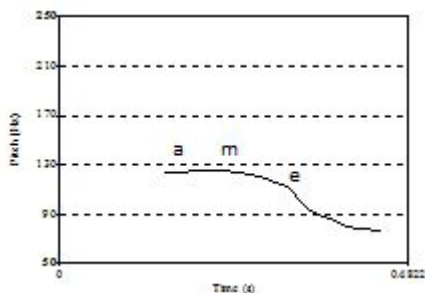
## 2. 先行研究

伝統的には、現代日本語（共通語）における語彙的アクセントとフレーザルなイントネーションは、基本的に非競合的つまり平和共存的と考えられてきた。

たとえば、天沼他 (1978) には、「日本語では、イントネーションがアクセントの型を崩すことはないということがいえる。」とある。またたとえば、Abe (1998) にも、“(Japanese lexical accent is) susceptible but usually not subservient to intonation… (It) resists being perturbed by intonation” とある。伝統的な考えのさらなる詳細については定延 (2005a) の紹介を参照されたい。

この伝統的な考え（以下「非競合説」と呼ぶ）によれば、語彙的なアクセントとフレーザルなイントネーションは具現をめぐって競合しない。むしろ、両者は相まって、2つのピッチの型のいずれかを生み出す。2つのピッチの型とは、連なり型 (copulative form) と重なり型 (cumulative form) である。

連なり型とは、まずアクセントがピッチに反映され、その後にイントネーションがピッチに反映されるという場合のピッチの型である。たとえば「雨」という語は単独で発音すれば、「あ」が高で「め」が低というアクセントがそのままピッチに反映されるが（音源1・図1を参照）（注1）、

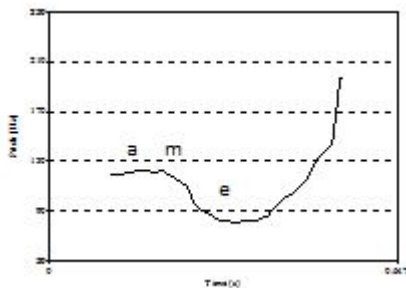


音源1: 単独で発音した語「雨」

図1: 音源1のピッチ

「雨」を問いかけて発音する場合、ピッチは「あ」から「め」にかけて下降

した後で、問いかけの上昇イントネーションどおりに上昇する（音源 2・図 2 を参照）。

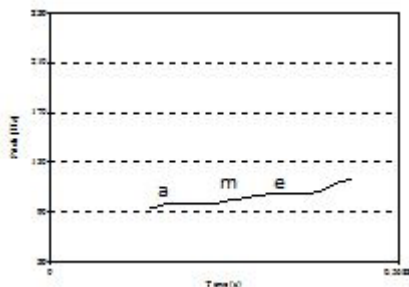


音源 2：問いかけ「雨？」

図 2：音源 2 のピッチ

この時のアクセントとイントネーションは連なり型のピッチの型を構成している。（なお、これらの音声は説明のために筆者が発音・録音したものであり、ピッチの抽出と表示には praat を用いた (praat 5207、[http://www.fon.hum.uva.nl/praat/download\\_win.html](http://www.fon.hum.uva.nl/praat/download_win.html))。以下も特別の断りがない場合は同様とする。）

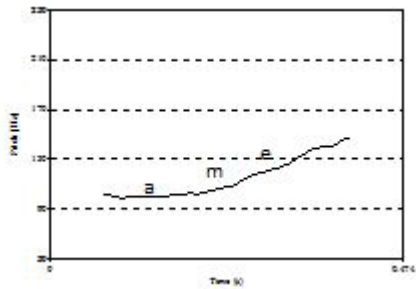
アクセントとイントネーションが同方向（仮に上昇方向とする）の場合は、重なり型がしばしば生じる。重なり型とは、アクセントとイントネーションが重なって具現されるという場合のピッチの型である。たとえば「飴」という語は単独で発音すれば、「あ」が低で「め」が高というアクセントがそのままピッチに反映されるが（音源 3・図 3 を参照）、



音源 3：単独で発音した語「飴」

図 3：音源 3 のピッチ

「飴」を問いかけで発する場合、ピッチは「あ」から「め」にかけて、より高く上昇する（音源 4・図 4 を参照）。



音源 4：問いかけ「飴？」

図 4：音源 4 のピッチ

この時のアクセントとイントネーションは重なり型のピッチの型を構成している。

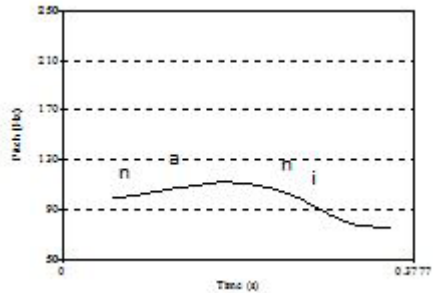
以上で紹介した連なり型や重なり型は、先の非競合説がまさに想定している型であって、非競合説で説明できる。しかし、非競合説では説明できない型がある。それが排他型である（表 1 を参照）。

表 1：非競合説では連なり型・重なり型（青色部分）は説明できるが排他型（赤色部分）は説明できない

	連なり型	重なり型	排他型
非競合説	+	+	-

ここで排他型と言うのは、アクセントとイントネーションのうち一方だけがピッチに反映される場合のピッチの型である。

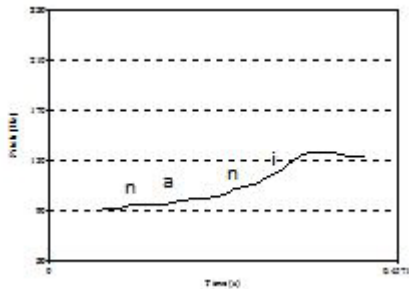
たとえば、「なに」という疑問の語は単独で発音すれば、「な」が高で「に」が低というアクセントがそのままピッチに反映されるが（音源 5・図 5 を参照）、



音源 5：単独で発音した語「なに」

図 5：音源 5 のピッチ

「なに」を強い問いかけで発音する場合、ピッチは「な」から「に」にかけて下降せず、問いかけの上昇イントネーションどおりに上昇することがある（音源 6・図 6 を参照）。この時のアクセントとイントネーションは排他型のピッチの型を構成している。



音源 6：強い問いかけ「なに？」

図 6：音源 6 のピッチ

図 6 を見るとピッチは末尾部分でわずかに下がっているが、このような末尾での小さいピッチ下降は、自然発話において「排他型」と感じられるもの（たとえば第 4.1 節で後述する「おいしいなー」（音源 20, 図 10）にも見られるものなので、排他型と見なして問題はないものと判断した。

これまでの研究は、排他型を積極的に認めようとはしてこなかった。たとえば、天沼他 (1978) では「動詞連用形+たい?」「動詞終止形/形容詞終止形/名詞+でしょう?」「動詞て形+ください」という 3 つのパター

ンが排他型で発音され得るものとして認められているが、その記述には不明な点が数多く残されている。例を挙げれば、「これらのパターンにおいて、排他型と連なり型の違いは何なのか?」という問題や、「動詞で形+ください」の排他型は、終助詞「よ」を伴う方が自然なのはなぜか?」という問題は、まったく無視されている。これは、他の研究においても同様である。

もっとも、語彙的なアクセントとフレーザルなイントネーションの競合的な関係を認める記述が、まったくないというわけではない (定延 2005a)。川上 (1963: 33, 37) には「アクセント核が上昇調のために消える」「極力軽く、第二種の上昇調で言おうとすれば、アクセントの滝は消えざるを得ない」という記述がある。また秋永 (1966: 58-59) にも、「奉読調」「暗記調」「子役のせりふ調」がアクセントの型を「無視」「破壊」という記述がある (但し、これらの調子がイントネーションかどうかは明言されていない)。森山 (1989: 173-174) でも、拍数やアクセント型の点で制約があるとしながら、イントネーションがアクセントの下降を無化するという現象が指摘されている。Abe Isamu は早くから競合的な関係を認めていたようで、本稿の「連なり型 (copulative)」「重なり型 (cumulative)」「競合型 (conflictive)」の英語名は Abe (1998: 362) から採っている。また、或る単語に対するフォーカスがイントネーションによって表されると、それに続く語群のアクセントが弱められると郡 (1997: 172-184) は述べている。これも、以上に挙げたものとは異なる形だが、やはり単語のアクセントが音調に反映されるのをイントネーションが阻害することを認める記述と見てよいだろう。だが、このようにアクセントとイントネーションの競合的な関係を部分的にせよ認める記述は、決して多くはない。排他型はそれほど稀なのだろうか?

### 3. 観察

冒頭で述べたとおり、本稿の考察対象は現代日本語の共通語である。だが、現代日本語にはさまざまな方言があり、それらの方言の研究に目を転



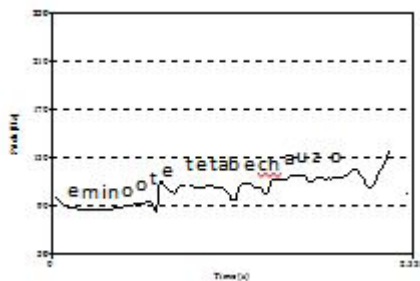
じてみると、語彙アクセントがピッチに反映されない排他型が記述されていることがわかる。以下、藤原 (1997) から 2 例だけを挙げておく。

第 1 の例は九州の南阿蘇方言で、「あーがしごとはだーもせん」(あのような仕事は誰もしない) と言う場合、全部分を高く平らに発することができる。

第 2 の例は蛇行調で、たとえば京都方言では、「そんなことしたらあかへんやないの」(そんなことしたらいけないじゃないの) と言う場合、「そんな」「し」「あ」「へん」の部分は高く、「こと」「たら」「か」「やないの」の部分は低く発することができる。

方言の研究と共通語の研究の間に見られるこのような違いは、具体的に観察されている対象の質的な違いと言えるかもしれない。方言研究においてよく観察される一方で、(実験室的環境に基づく) 共通語研究においてしばしば無視されるのは、強い気持ちを伴った発話である。そして、強い気持ちを伴った発話に目を向けると、共通語の発話においてもやはり排他型が見出される。以下では 3 つの例を挙げる。

共通語における排他型の第 1 の例は、じりじりとした漸次的な上昇調である (音源 7・図 7 を参照)。



音源 7: 「エミのお手々食べ  
ちやうぞー」

図 7: 音源 7 のピッチ

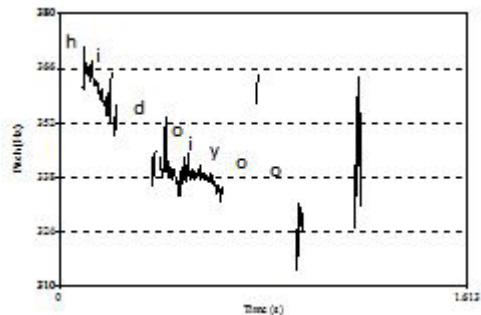
これは、「エミちゃんデータ」という通称で知られるある母子の会話データベース (杉藤 2005) から採ったものである (第 14 巻 B 面 49 分 32 秒前後)。(このデータベースの収録時期は 1970 年代後半で、収録場所は大阪

だが、本稿で問題としているアクセントとイントネーションの關係に関するかぎり、このデータは古さや方言色を何ら感じさせないので使用した次第である。)ここで取り上げたのは、母がエミという娘を冗談でこわがらせてやろうとしている際の発話「エミのお手々食べちゃうぞー」であって**(注2)**、末尾では「ワァン」と、なにもものか(文脈からすれば怪獣かもしれない)が娘の手を食べようとする様子の擬音語まで母は発している。この末尾の「ワァン」を除けば、この発話のピッチは90ヘルツ前後から110ヘルツ前後まで、2秒ほどかけてなだらかに上昇する形になっており、「エミ」(高低)や「食べちゃう」(高低低低)などの語彙的アクセントの反映は見てとれない。

第2の例は暫時的に下降するものである(ビデオ1・音源8・図8を参照)。



ビデオ1 : Kinki Kids



音源 8：ビデオ 1 中の「ひどいよー」

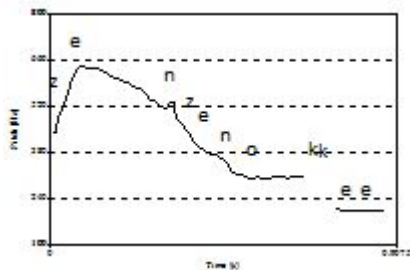
図 8：音源 8 のピッチ

これは、筆者を含む研究グループが 2000 年代中盤に収録した日常会話音声データベースから採ったものである。ここでは 2 人の若い女性話者が、“Kinki Kids” という有名なアイドルグループに関する談義に打ち興じている。相手の声が大きくかぶさってきており、図 8 にははっきりと現れていないが、「ひどいよー」という話し手の声は聴覚印象では、約 1.5 秒かけて（図 8 で言えば 380 ヘルツ前後から 330 ヘルツ前後へ、ということになるだろうか）ゆっくりと下降している。ここでは、「ひどい」（低高低）という語彙的アクセントはピッチには反映されていない。（なお、特に自然会話の場合、「聴覚印象がどうであっても、ピッチ図に現れていなければ何も認められない」という立場は現実的ではないと筆者は考えている。ここでのピッチ図の呈示も、あくまで参考以上のものではない。）

排他型の第 3 の例は、発話冒頭が高く、そこから下降するもので、ここではこれを「高+下降調」と仮に呼んでおく（ビデオ 2・音源 9・図 9 を参照）。



ビデオ 2：電話を終えて



音源 9：ビデオ 2 中の「全然オッケー」

図 9：音源 9 のピッチ

これは、筆者を含む研究グループが 2000 年代終盤に収録した日常会話データベース（動画付き）から採ったものである。この画像は視野 360 度のカメラで撮影したもので、画面の上半分、下半分でそれぞれ 180 度がとらえられている。上半分の左端と下半分の右端がつながっており、上半分の右端と下半分の左端がつながっている。ここで映し出されているのはある家の内部である。画面上半分には 1 人の女性がこちらに背を向けて立っており、固定電話で誰かと会話している。画面下半分には 1 人の女性が横顔を向けて映っている。立っている女性が丁寧な口調で電話会話を終えて切ると、画面下半分の女性が「大丈夫でした？」と訊ねる。それに対する返答として、立っている女性が発する「全然オッケー！」は、冒頭の「ぜ」は 640 ヘルツに達するほど高く、そこから末尾にかけてピッチは下降してい

る。ここでは「全然」（低高高高）という語彙的アクセントのピッチへの反映を見ることはできない。

以上で見た3つの例では、語彙アクセントの実現がピッチに認められない。排他型は、これまで伝統的に考えられていたよりも、もっと頻繁に幅広く観察できるようである。

#### 4. 提案～競合説と「強さのアイコニシティ」

以上の観察を踏まえて、語彙アクセントとイントネーションの関係について、競合説を提案したい。この説によれば、日本語（共通語）のアクセントとイントネーションは、排他型が基本となる。つまりアクセントとイントネーションは、相手を抑えて自分だけがピッチに反映されようと、常に競合している。

競合説が排他型を説明できるということは言うまでもない。では、連なり型や重なり型についてはどうだろうか？

筆者の提案は、話し手の気持ちと、対応する韻律の間に「強さのアイコニシティ」を認めれば、競合説は排他型と同様、連なり型や重なり型を説明できるし、さらに、従来の非競合説では説明できなかった、非排他型（連なり型や重なり型）の特徴も導き出せるというものである。

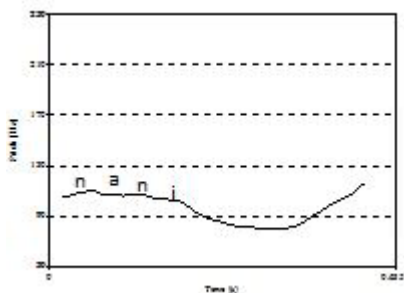
ここで「強さのアイコニシティ」というのは、話し手の気持ちが強いほど、話し手はその気持ちに対応する韻律を発することに集中しやすい、その結果としてその韻律は排他型を生み出す強い力を得やすいという考えである。

この考えを採用すれば、非排他型（連なり型・重なり型）は、「話し手に強い気持ちがない」という特徴を持つことになる。連なり型や重なり型は、この特徴のせいで、語彙アクセントとイントネーションの競合が「引き分け」に終わったものとして理解できる。

以下、強さのアイコニシティの妥当性を2つの方法で示しておきたい。

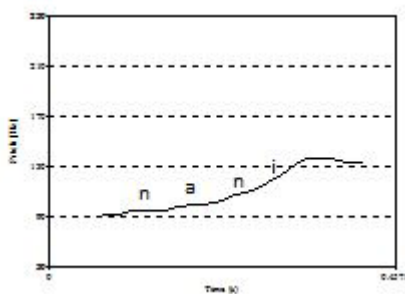
## 4.1 知覚実験

強さのアイコシティの妥当性を示す第1の方法は、疑似的な最小対を用いた知覚実験である。疑似的な最小対というのは、たとえば2つの発話「なに？」(連なり型は音源10と図10を参照。排他型は音源11と図11(前掲の音源6・図6と同じ)を参照)のようなものである。



音源10：連なり型の「なに？」

図10：音源10のピッチ



音源11：排他型の「なに？」  
(= 音源6)

図11：音源11のピッチ (=図6)

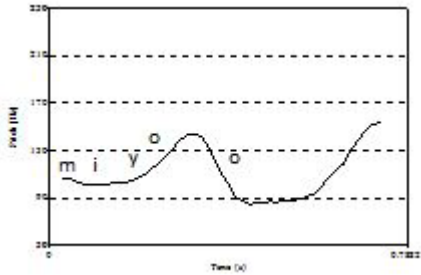
この2つの「なに？」は、もしも相違点がピッチだけであれば最小対 (minimal pair) を構成すると言えるだろうが、実際にはこの2つはピッチだけでなくパワー、長さ、声質なども異なる (少なくとも長さはかなり異なる) 以上、「疑似的」な最小対でしかないということは認めておきたい。もちろん、知覚実験には最小対を持ち出せれば理想的だが、そのような発

話のペアは（合成発話ではなく人間の発話にこだわるという本稿の立場に立つ以上は）まず得られないので、ここでは疑似的な最小対で妥協する次第である。

ここで言う、疑似的な最小対を用いた知覚実験とは、最小対の音声を被験者に2度聞かせて、各々どのような気持ちを感じられるかを選択肢で問うたものである。被験者は筆者に無償で依頼された関西の大学生30名である。気持ちの選択肢は筆者が筆者自身の内省に基づき作成したものだが、被験者には複数回答を認める一方で、違和感があればいずれの選択肢をも選択する義務はないということを伝えてある。

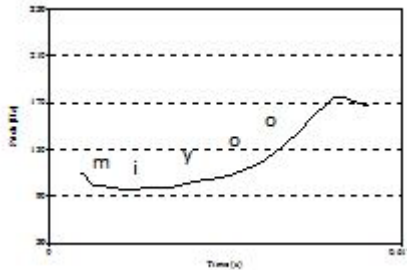
実験の結果は以下のとおりである。連なり型の「なに？」の場合は、多くの被験者（29名）が感じたのは「たずね」という気持ちで、それ以外には「弱い驚き」がわずかにあり（3名）、「強い驚き」を感じた被験者はいなかった。これに対して、排他型の「なに？」の場合は、「強い驚き」が最も多く（28名）、次いで「弱い驚き」で（17名）、「たずね」を感じた被験者はいなかった。この結果は、「たずね」「弱い驚き」「強い驚き」という3つの気持ちには、「たずね」が気持ちとして最も弱く、「強い驚き」が最も強く、「弱い驚き」が両者の中間という関係が成り立つ」という常識的な判断に基づけば、「強い驚き」という強い気持ちと結びつくイントネーションがピッチに独占的に反映されて排他型を生み出す一方で、「たずね」や「弱い驚き」という相対的に弱い気持ちと結びつくイントネーションは、排他型を生み出さないということを示しており、強さのアイコンシティの考えどおりとすることができる（注3）。

似たことは「動詞しよう」形についても観察される。たとえば、連なり型の「見よう？」（音源12・図12を参照）は「おまえは『見よう』と言ったのか？」という問い返しとは感じられても（24名）、「一緒に見ないか？」という誘いかけとは感じられなかったが（0名）、排他型の「見よう？」（音源13を参照）は逆に問い返しとは感じにくく（1名）、誘いかけの方が遙かに感じられやすかった（27名）。



音源 12: 連なり型の「見よう？」

図 12: 音源 12 のピッチ



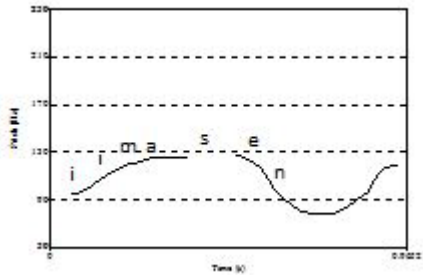
音源 13: 排他型の「見よう？」

図 13: 音源 13 のピッチ

このような連なり型と排他型の違いは、強さのアイコニシティを認め、問い返しと比べて誘いかけは策動的 (deontic) で強く、そのため上昇調イントネーションが排他型を生み出すと考えれば理解できる

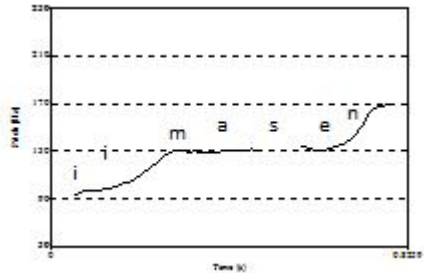
「動詞ません」形の場合は、ピッチと気持ちの結びつきは少し重なり気味になるが、やはり今示した「動詞しよう」形と同様の傾向を見ることが出来る。たとえば、連なり型の「言いません？」(音源 14・図 14 を参照) は、「言いません」と言ったのか？」という問い返し (17 名)、「言わないんですね？」のような確認 (24 名) をよく感じさせ、「言うでしょう？」のような強い確認 (5 名)、「言いましょうよ」のような誘いかけ (5 名) を感じた被験者は少なかったが、排他型の「言いません？」(音源 15 を参照) は、問い返し (1 名)、確認 (8 名) はあまり感じさせず、むしろ、強い確認 (20 名) や誘いかけ (28 名) を感じさせた。





音源 14：連なり型の「言いません？」

図 14：音源 14 のピッチ



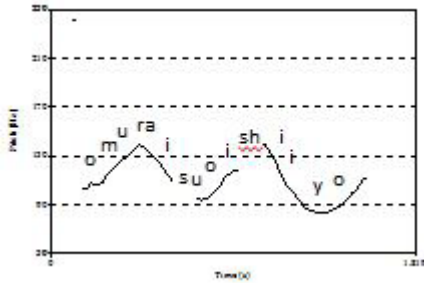
音源 15：排他型の「言いません？」

図 15：音源 15 のピッチ

これも、「問い返し、確認、強い確認、誘いかけ」という気持ちの強きの序列（問い返しが最も弱く、誘いかけが最も強い）を認めれば、気持ちのアイコンシティによって自然に理解できる。

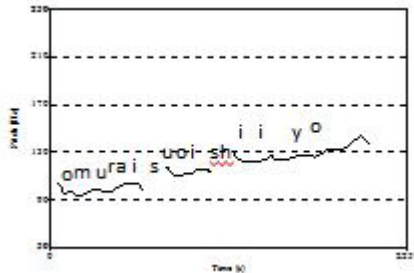
終助詞が付いている文についても、類似の結果を得ることができる。たとえば、終助詞「よ」で終わる文「オムライスおいしいよー」は、連なり型（音源 16・図 16 を参照）であれば、「おまえは『オムライスおいしいよ』と言ったのか？」という問い返しや（20 名）、「おまえは『オムライスおいしい』と知っているか？」という質問といった（20 名）、相対的に弱い気持ちだけでなく、「オムライスと一緒に食べよう」という誘いかけ（15 名）、「オムライスを食べないと後悔するぞ」（13 名）という、冗談での脅

しのような、相対的に強い気持ちも感じさせた。その一方で、排他型（音源 17・図 17 を参照）は、誘いかけ（28 名）や冗談での脅し（28 名）のような強い気持ちしか感じさせなかった。



音源 16：連なり型の「オムライ  
スおいしいよー」

図 16：音源 16 のピッチ

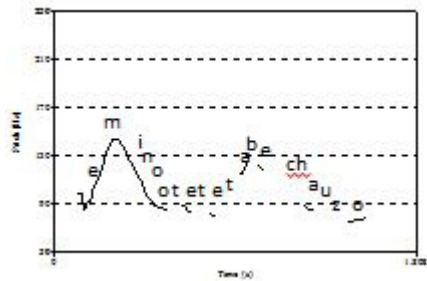


音源 17：排他型の「オムライ  
スおいしいよー」

図 17：音源 17 のピッチ

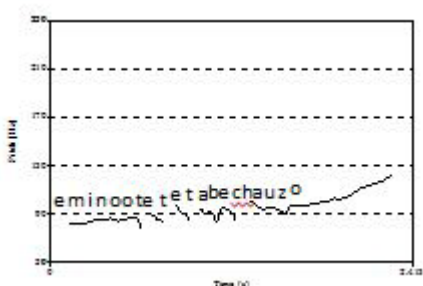
なお、ここで注意が必要なのは、このような排他型は、文末の「よ」が無ければ不自然である、つまり、終助詞「よ」が排他型を実現しやすくしているということである。終助詞「よ」の意味を厳密にとらえることは容易ではないが、「よ」が結果的に話し手の強い気持ちの発現に貢献することは広く認められていると言ってよいだろう。したがって、終助詞「よ」が排他型を容易にすることも、強さのアイコンシティを認めれば理解できる。

「よ」の場合と同様、終助詞「ぞ」もまた、話し手の強い気持ちの発言に貢献すると言え、やはり排他型を実現しやすくする。例として「エミのお手々食べちゃうぞ」という文を挙げてみよう。この文を連なり型で発するなら (音源 18・図 18)、「エミの手を食べてしまうということをわかっているか」という確認の気持ち (12名)、「エミの手を食べてしまう、どうだ」という脅しの気持ち (18名) が感じられたが、第3節で先述したエミの母と同様、これを排他型で発するなら (音源 19・図 19)、脅しの気持ちは感じられやすいのに対して (27名)、確認という弱い気持ちは感じられなかった (0名)。



音源 18：連なり型の「エミのお手々食べちゃうぞー」

図 18：音源 18 のピッチ



音源 19：排他型の「エミの  
お手々食べちゃう  
ぞー」

図 19：音源 19 のピッチ

「エミちゃんデータ」には、終助詞「ぞ」の文だけでなく、終助詞「な」の文にも排他型の発音が見られる。この場面では、エミと母は一緒に絵本を見ており、母は絵本の中のおにぎりを取って食べるまねをしている。そのおにぎりがとてもおいしいと感嘆する文「おいしいなー」は、排他型で発せられている（「エミちゃんデータ」第 13 巻 B 面 30 分 20 秒前後、音源 20・図 20 を参照）。

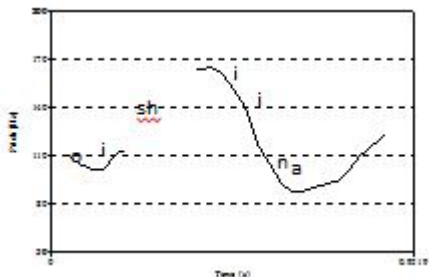


音源 20：自然発話の「おいし  
いなー」

図 20：音源 20 のピッチ

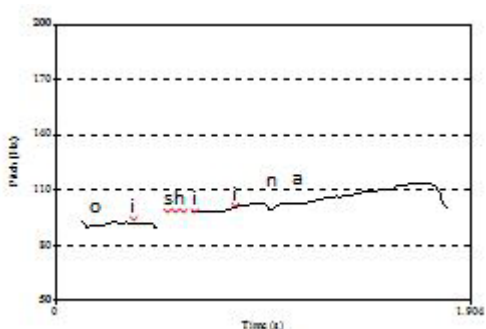
そこで、連なり型「おいしいなー」（音源 21・図 21 を参照）と共に、この自然発話に似せて排他型「おいしいなー」を作成し（音源 22・図 22 を参照）、知覚実験をおこなった。実験の結果、連なり型は「おまえは『お

『おいしい』と言ったのか？」という問い返しや（5名）、「おまえは『おいしい』と思うだろうがそのとおりか」という確認の気持ちは感じられるが（10名）、「なんとおいしいことか！」という感嘆（0名）は感じられなかった。その一方で、排他型は感嘆とは感じられやすい一方（28名）、問い返しとは感じられず（0名）、確認とも感じられにくかった（3名）。



音源 21：連なり型の「おいしいなー」

図 21：音源 21 のピッチ



音源 22：排他型の「おいしいなー」

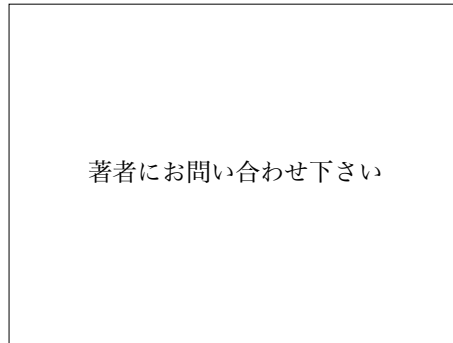
図 22：音源 22 のピッチ

## 4.2 アクセントがイントネーションを抑え込んで勝利する可能性

強さのアイコンシティの妥当性は、以上で取り上げた疑似的な最小対に見られるだけではない。語彙的アクセントとイントネーションの競合が常

にイントネーションの一方的勝利に終わるわけではなく、時には逆にアクセントがイントネーションを抑え込んで独占的にピッチに反映されるという事実もまた、強さのアイコニシティの妥当性を示してくれる。というのは、どのような場合になぜ語彙的なアクセントがイントネーションを抑え込んでピッチに独占的に反映されるのかは、強さのアイコニシティを認めてはじめて理解できることだからである。

例として、自動車レースの中継（『F1 グランプリ モナコ大会』（関西テレビ 2003 年 5 月 31 日）の 1 シーンを観てみよう。これは、モントーヤというレーサーが、自分のチーム（ウィリアムズ BMW）のピット（タイヤ交換や燃料補給をする場所）に入るまでのシーンである（ビデオ 3 を参照）。



ビデオ 3：モントーヤのピットインの実況

このシーンの最後で、実況中継者（塩原恒夫氏）は、「さあ、8 秒 2 という静止時間のあと、スピード制限の設けられたこのせまいピットロードを行きますパン・パブロ・モントーヤのマシン！」という発話のほとんどの部分を、高く平らなピッチで発している（音源 23・図 23 を参照。図 23 は騒音が大きいため praat でのピッチの分析が難しく、朱春躍氏に、「SUGISpeechAnalyzer」という別の音声分析ソフトウェア（製作：（株）アニモ、監修：杉藤美代子 <http://www.animo.co.jp/analyze/sugi/>）で分析して頂いたものである）。（なお、塩原氏によって「パン・パブロ・モントーヤ」と発音されているレーサーの名は正しくは「ホアン・パブロ・モントーヤ

(Juan Pablo Montoya)」だが、ここでは聴覚印象に忠実に「パン・パブロ・モントーヤ」と記しておく。）



音源 23：実況中継「さあ、8 秒 2 という静止時間のあと、スピード制限の設けられたこのせまいピットロードを走りますパン・パブロ・モントーヤのマシン！」、



図 23：音源 23 のピッチ

これらの部分は、叫ぶような強い興奮の気持ちと結びつく高い平らなイントネーションが語彙アクセントを抑え込んで、独占的にピッチに反映された排他型と理解できる。ところが、その中で「せまい」の部分だけは、ピッチにはっきりとした起伏が認められる。つまり「せまい」の語彙アクセント（低高低）がその高平調のイントネーションを抑え込んでピッチに独占的に反映されている（図 23 の赤丸部分）。このことは、強さのアイコンシティを認めて初めて、次のように理解できる：この発話に先立つ部分で、実況中継者がゲスト（元 F1 レーサーの片山右京氏）やレポーター（近藤真彦氏）と共に「ピットロードがいかにせまいか」を話しており、単語「せまい」は話し手の強い気持ちと結びついていたので、単語「せまい」の語彙アクセントがそれだけ強くなり、イントネーションを抑え込んだ。

音源 23 に先行する談話で「ピットロードがいかにせまいか」ということがいかによく話題にのぼっていたかは、上掲のビデオ 3 を参照されたい。なお、ビデオ 3 の末尾部分では、音源 23 の直後にレポーター（近藤真彦氏）

が「出口もせまい！」と（しかも排他型で）叫んでいる様子を聞くことができる。このことが示唆するのは、モントーヤというレーサーのピットインという出来事が語られている間にも、「ピットロードのせまき」が潜在的な話題として存続していたということである。

以上、非競合説と競合説について本節で述べたことは、次の2点にまとめられる（表2を参照）。

表2：非競合説と競合説による説明可能性

	連なり型	重なり型	排他型
非競合説	+	+	-
競合説	+	+	+

第1点、非競合説と異なり、競合説は、これまで考えられていたよりも頻繁に、そして幅広く観察される排他型を説明できる。排他型には、イントネーションの勝利に終わるものだけでなく、アクセントの勝利に終わるものもあり、このことは競合説を認めてはじめて説明できる。

第2点。強さのアイコンシティを採用することによって、競合説は、連なり型や重なり型に「話し手の強い気持ちが見られない」という特徴があることを正しく示してくれる。

## 5. 予想される反論と再反論

競合説に対しては、「排他型はしばしば不可能だ」という反論がなされることが予想される。たとえば「ようこそ」「すばらしいわねえ」「過ごそうなんて」などのフレーズは、話し手がどのように強い気持ちで発したとしても、それらの語彙アクセント（「ようこそ」は高低低低、「すばらしい」は低高高高低、「過ごそう」は低高高低）がピッチにそのまま反映されるしかない。このことはやはり、日本語が非排他型を基本とすることを示し



ている、というのが反論の内容である。

しかし、この反論は妥当でないと考えられる。その理由は2点ある。第1点は、この反論が「現実性 (actuality)」と「可能性 (possibility)」を混同してしまっていることである。つまり、ある排他型がたまたま現時点で発せられることがないからといって、その排他型が不可能ということにはならないのに、この反論は両者を同一視してしまっているということである。第2点は、この反論が、話し手の社会-心理的なタイプ (これを「キャラクタ」と仮称する) のバラエティを考慮に入れていないということである。

以下、これら2点を詳しく述べておく。

## 5.1 現実性と可能性

ここでは、本稿の主張する競合説に対する上記の反論が、現実性と可能性を混同していることを論じる。例として「からくない？」のような「形容詞ない？」形を取り上げよう。

「形容詞ない？」形は、伝統的には専ら連なり型 (音源24・図24を参照) で、「おまえは『からくない』と言ったのか？」という問い返しや「からいのか、それともからくないのか？」という質問の気持ちで発せられていた。だが、近年、若年層話者が、たとえば「私はからいと思うのだが、おまえも私に同意するだろうな？」のような、仮に同意要求とでも言えるような強い気持ちで、これを排他型で発している (音源25・図25を参照)。



音源24：連なり型の「からくない？」

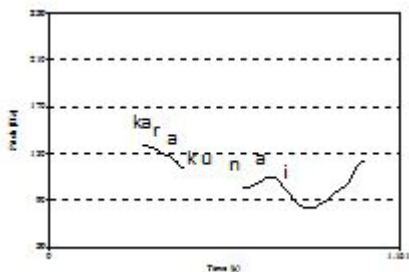
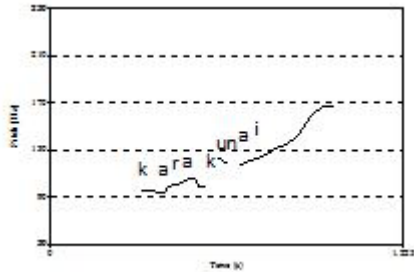


図24：音源24のピッチ



音源 25：排他型の「からくない？」

図 25：音源 25 のピッチ

ここで重要なのは、この排他型の「形容詞ない？」形が、実現したのは近年だが、それ以前の時点から、可能ではあったはずだ、ということである。「形容詞ない？」形は、話し手がどのように強い気持ちで発したとしても、それらの語彙アクセントがピッチにそのまま反映されるしかない。である以上、やはり日本語は非排他型を基本とするのだ」という論が正しくないことは、排他型の「形容詞ない？」が実現した後の我々は皆知っているはずである。ある排他型がたまたま現時点で実現していないからといって、その排他型が不可能ということには必ずしもならない。

では、この排他型の「形容詞ない」形はどのようにして生じたのか？ 第4.1節で述べたように「動詞ません」形は（そして「動詞ない」形も）、排他型で、強い確認（「言うでしょう？」）や誘いかけ（「言いましょうよ」）の気持ちで発せられる。「からくない」のような「形容詞ない」形を強い気持ちで排他型で発するのは、従来から動詞の否定形でおこなっていることをモデルに形容詞の否定形を合わせるといふ類推によるものだろうが（定延 2005a,b）、品詞の違いを別とすれば、おこなっていること（つまり強い気持ちと排他型の結びつき）自体は強さのアイコニシティを認めてはじめて理解できることである。

## 5.2 話し手の社会—心理的なタイプ（キャラクタ）

上記の反論は、話し手の社会—心理的なタイプ（これは「キャラクタ」

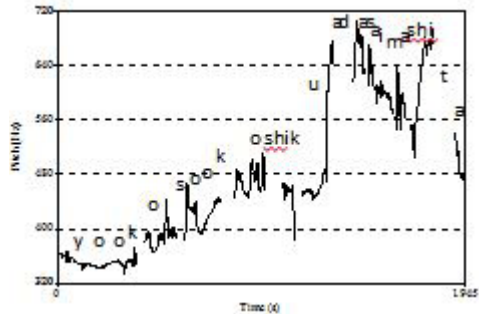
と呼ばれることがあり、本稿でもそう呼ぶ。定延 (2011), Sadanobu (2010–2012) を参照) のバラエティを考慮に入れていないという点でも問題がある。排他型が一見、不可能と思えても、実際のところ、話し手のキャラクターによっては現実のものになっているということは珍しくない。つまり、或る排他型について「不可能だ」という判断を下す前に、我々はまず、さまざまなキャラクターのしゃべり方（これは金水 (2003) の「役割語」に相当する）に十分に注目しなければならない。

ここで例として、映画会社・ユニヴァーサル社が経営するテーマパーク「USJ (ユニヴァーサル・スタジオ・ジャパン)」における、綾小路麗華（あやのこうじ・れいか）という有名な女性（写真1を参照）の発話「ようこそお越し下さいました」を見てみよう（音源 26・図 26 を参照）。



写真 1：綾小路麗華

[[http://www.usj.co.jp/CWY/meet\\_chara/profile02.html](http://www.usj.co.jp/CWY/meet_chara/profile02.html), 最終確認日：2012年11月23日]



音源 26：綾小路麗華の発話  
「ようこそ越し下  
さいました」[http://  
www.youtube.com  
/watch?v=YXFPG  
mPUwt4, 最終確認  
日：2012年11月  
23日]

図 26：音源 26 のピッチ

この発話では、一見、語彙的アクセントどおりに発するしかないと考えていた「ようこそ」が、その語彙アクセント（高低低低）を無視されて、上昇調で発せられており、この部分で排他型が実現している。

綾小路麗華の別の発話を聞いてみよう（音源 27 を参照）。この発話は、「なんと無料で入れるシステムらしいじゃないのすばらしいわねえ。カウントダウンとバレンタイン、この冬の2大イベントを我がユニバーサルスタジオジャパンで過ごそうなんて一、他に行くところ無かったのかしら皆様」というもので、観客を盛り上げつつ、「彼らは普段から暇を持てあましているのだろう」という侮蔑的なコメントで終わっているところは、綾小路麗華の傲慢なキャラクターがよく現れている。この発話が、「ようこそ」と同様、語彙的アクセントのままに発するしかないと考えていた「すばらしいわねえ」「過ごそうなんて」を含んでいることに注意されたい。



音源 27：綾野小路麗華の発話「なんと無料で入れるシステムらしいじゃないのすばらしいわねえ。カウントダウンとバレンタイン、この冬の2大イベントを我がユニバーサルスタジオジャパンで過ごすなんて一、他に行くところ無かったのかしら皆様」

[[http://www.youtube.com/watch?v=pgwkatc\\_Bhw](http://www.youtube.com/watch?v=pgwkatc_Bhw), 最終確認日：2012年11月23日]

そして、これらはいずれも、エキセントリックでハイな彼女の浮き立つような興奮口調の中で、アクセントが顧みられずに上昇調で発せられており、排他型が実現している。(音源 28・図 27、音源 29・図 28 を参照)。



音源 28：音源 27 中の「すばらしいわねえ」

図 27：音源 28 のピッチ



音源 29：音源 27 中の「過ぎ  
そうなんてもう」

図 28：音源 29 のピッチ

このようなしゃべり方は綾小路麗華という演じられた一個人に特有のものではなく、より一般的なもので、一部の「ハイ」な（典型的には女性の）キャラクターのものと言えそうである。

以上、この第 5 節では、競合説に対して予想される反論「排他型はしばしば不可能だ」を取り上げ、この反論が現実性と可能性を混同しており（第 5.1 節）、話し手のキャラクターのバラエティも考慮に入れておらず（第 5.2 節）、不当であることを示した。

## 6. 結論

本稿の結論は次の 4 点にまとめることができる。

第 1 点。日本語(共通語)の語彙的アクセントとフレーザルなイントネーションの関係をとらえるには、伝統的な非競合説よりも競合説の方が有効である。アクセントとイントネーションは潜在的には、ピッチへの反映をめぐって潜在的に競合している。つまり基本は排他型である。

第 2 点。非競合説よりも競合説の方がよいという本稿の主張は、以下 2 つの観察結果により支持される：その 1、これまで考えられていたよりもずっと頻繁に幅広く生じることが判明した排他型を（アクセントがイント

ネーションを抑え込む場合も含めて) 説明できるのは競合説だけである；その2、連なり型や重なり型の場合には話し手の強い気持ちがないということ、競合説は、強さのアイコニシティの考えを取り入れることによって正しく示す。

第3点。強さのアイコニシティ（話し手の気持ちが強いほど、その気持ちに対応する韻律が強い力を得て、排他型を生み出しやすくなるという考え）は、少なくとも2点の根拠を持つ。それは、疑似的な最小対立を用いた聴覚実験と、アクセントがイントネーションを抑え込んで勝利する現象である。

第4点。競合説に対して予想される反論「排他型はしばしば不可能だ」は、可能性と現実性を混同しており、話し手のキャラクタのバラエティも考慮に入れておらず、不当である。

これまで非競合説が基本と考えられていたのはおそらく、実験室的環境では被験者はふつう強い気持ちを示さないせいではないか。アクセントやイントネーションに関する我々の理解を深めていくには、我々は実験室的環境を越えて、より広い視野を持つ必要があるだろう。

## 注

- 1：一般にはピッチと共に音声波形が示されることが多いが、本稿では音源が呈示されており、煩雑になるので、ピッチのみを示すことにする。
- 2：末尾「ぞー」は一部の再生機器・聞き手によっては「どー」らしく聞こえることがあるが、エミちゃんデータの文字データが「ぞー」となっていることや、大阪では（少なくとも女性の）「ど」が一般的でないことから、「ぞー」と判断した。
- 3：連なり型の「なに？」と排他型の「なに？」は意味が異なる別々の同音異義語だとする処理法は2つの理由で本稿では採用していない。第1の理由は、実験の結果が示すように、連なり型の「なに？」と排他型の「なに？」の解釈は「弱い驚き」の部分で重なっているほど近く、この近さは2つの「なに？」を別語としてしまうと説明困難になる、ということである。第2の理由は、単一の文について強い気持ちが排他型と

結びつき、弱い気持ちが排他型と結びつかないという現象は本文以下で述べるように広範に観察されるものであって、この一般的傾向を認めた段階で、「なに？」を別々の2語とする処理法は必要なものではなくなるということである。

## 謝辞

本稿は、ヨーロッパ日本研究協会第13回大会（EAJS 13、2011年8月26日、於タリン大学（エストニア））での口頭発表“The competitive relationship between Japanese accent and intonation”を改訂の上、日本語にしたものである。司会をつとめて下さった Bjarke Frellesvig 先生や建設的な質問やコメントを下さったフロアの諸氏に感謝したい。また、特にデータの利用や分析その他、さまざまなサポートを頂いた Nick Campbell 先生、永野 Madsen 泰子先生、林良子先生、金水敏先生、朱春躍先生、そして亡くなられた杉藤美代子先生に対して、お名前を記して謝意を表したい。有益なコメントを下さった査読委員諸氏にもお礼申しあげる。本稿は日本学術振興会の科学研究費補助金による基盤研究(A)「状況に基づく日本語話しことばの研究と、日本語教育のための基礎資料の作成人物像に応じた音声文法」（課題番号：23242023, 研究代表者：定延利之）および基盤研究(B)「役割語の総合的研究」（課題番号：23320087, 研究代表者：金水敏）の成果の一部である。

## 言及文献

- Abe, Isamu. 1998 Intonation in Japanese. In Hirst, Daniel, and Albert Di Cristo (eds.), *Intonation Systems: A survey of Twenty Languages*, 360–375, Cambridge, U.K.; New York, N.Y.: Cambridge University Press.
- 秋永一枝 1966 「日本語の発音—イントネーションなど—」『講座日本語教育』2, 早稲田大学語学教育研究所, 48–60.
- 天沼寧・大坪一夫・水谷修 1978 『日本語音声学』, 東京:くろしお出版.
- 藤原与一 1997 『日本語方言音の実相』, 東京:武蔵野書院.
- 川上 秦 1963 「文末などの上昇調について」『国語研究』16, 國學院大



學国語研究会, 25–46.

- 金水 敏 2003 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』. 東京: 岩波書店.
- 郡 史郎 1989 「強調とイントネーション」 杉藤美代子 (編) 『日本語の音韻・音声 (上)』 316–342, 東京: 明治書院.
- 森山卓郎 1989 「文の意味とイントネーション」 宮地裕 (編) 『日本語学要説』 172–196, 東京: 明治書院.
- 定延利之 2005a 「日本語のイントネーションとアクセントの關係の多様性」 『日本語科学』 17, 国立国語研究所, 5–25.
- 定延利之 2005b 『ささやく恋人、りきむレポーター—口の中の文化—』. 東京: 岩波書店.
- 定延利之 2011 『日本語社会 のぞきキャラくり—顔つき・カラダつき・ことばつき—』. 東京: 三省堂.
- Sadanobu, Toshiyuki 2010–2012 *An Unofficial Guide for Japanese Characters*. [http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/wp/author/sadanobu-e/ (Sanseido Word-Wise Web)]
- 杉藤美代子 2005 「乳幼児と母親との対話音声データベース—エミちゃん: その紹介と利用について」 『音声研究』 9 (3), 52–57.